ドイツ植物園、動物園事情

ーベルリン ボタニッシャーガルテンから学ぶものー

白 岩 善 博

植物園前の著者

旧西ドイツの都市には殆ど、ボタニッシャーガルテン（植物園）、ツオロギッシャーガルテン（動物園）、テイアガルテン（小規模動物園＋公園）があり、市民の憩いの場となっている。入場料は無料か非常に安く（150円位）、市民が気軽に散歩気分で園内を歩き回っており、長蛇の列を作ってやっとお目当ての動物を見るようなことはない。私がアレキサンダー・フオン・フンボルト財団の協同研究員としてしばらく滞在した北ドイノツの小都市ビーレフエルト市は、周辺地域を合わせても20万人ほどの人工で、これといった産業もないのに、ボタニッシャーガルテンとテイアガルテンを有していた。ボタニッシャーガルテンは、規模はあまり大きくはないが、植物名やその丁寧な解説もあり、家族連れで休日を楽しむには十分であった。また、テイアガルテンは、地元の野生動物を主とし、北ヨーロッパに生息するホ乳類や鳥類を中心に主に野外で飼育している。いずれも入場は無料であり、市民の格好の散歩コース（ドイツ人の趣味は散歩といわれる）になり、多くの市民でいつも賑わっていたのが印象的であった。

本格的動物園は、アウトバーンを車で北西へ1時間ほどのミュンスター、西へ1.5時間ほどのブッパータール、東へ1時間ほどのハノーフアーにあり、これらは何れも、ドイツでも有数の規模を誇るものである。人工45万人を有する我が新潟市には、立派な水族館（マリンピア）がオープンし、多くの市民で賑わっているものの、入場料は高く、市民が気軽に散歩気分でとはなかなか行くことが出来ないのは大変残念なことである。さらに、植物園や動物園となると近くにはなく、子供達が絵本に出てくる動物を見るためには、東京上野動物園まで出向き、大変な苦労と費用をかけてやっとお目当ての動物に出逢うしかないというのははなはだ残念である。文化に対する考え方のレベルの差を見せ付けられる思いである。

旧西ベルリンは人工200万人のドイツ最大の都市であり、市街地はベルリン方式と呼ばれるアパート群を始め、多くの近代建築が並ぶ大都会であるが、周辺は森と湖に囲まれた、緑豊かな街でもある（このことは、恐らく多くの方が以外に思われるのではないでしょうか）。ここにも、あの有名なツオーロギッシャーガルテン（1844年開園のドイツ最古の動物園で、鳥類のコレクションではヨーロッパ随一といわれている。ここのパンダ2頭は普通の部屋にすみ、動物舎のドアは戸外に通じており、その辺の牧場にあるような柵から手を伸ばせば届く近さで、動き回っているパンダを見ることが出来る）、テイアガルテン（東ドイツとの境界であったブランデンブルク門に通じる広大な公園）、水族館、そして次に少し詳しく紹介するボタニッシャーガルテンがある。

ベルリンボタニッシャーガルテンは、1899－1910年にアドルフ　エングラー（Adolf Engler）によって作られた、ヨーロッパ最大の植物園であり、200万点の植物標本が所蔵されているボタニッシャームゼウム（植物博物館）が併設されている。園は、原生林を利用して作られ、北欧の典型的な植生を見ることが出来るだけでなく、世界各地の植生の一部をそのまま再現したエリアがあり、極く一部ではあるが各国の森の一部を伺い識ることができる。日本、韓国、中国などの森の一部も再現されている。また、16もある巨大温室では、熱帯雨林、乾燥地帯、草原などの気候が人工的に作られており、世界各地の典型的な森林の植生、水辺の植生、砂漠の植生が再現されている。最大の温室は、熱帯温室で、高さ25m もある。また、1800種を有する樹木園（14 ha ）合わせ、総面積は42 ha で、18000種以上の植物を有している。この施設も市街地の一角にあり、市民が気軽に出入りできるよう工夫されている。

現在地球環境の悪化が問題となり、環境保護、自然保護などの言葉を目にしない日はないほどである。ブナ原生林などの重要性も叫ばれ続けている。自然保護の意識も自然の大切さが解らなければ芽生えてこない。そのためか、県民憩いの森や、キャンプ場などを整備し、自然との交わりを多く持って欲しいとの努力もなされている。森の中に散歩コースを整備し、多くの人に自然の素晴らしさを知ってもらいたいとの努力もその一つであろうか。しかし、これで終わってはいけない！

確かに自然は自然の中にあってみるのが一番であろう。しかし、我々が確かな自然を見る目を持っていなければ、宝の山に入っても初めは何も見ることはできない。その目を養うには時間がかかり、年に一、二回の山行きでそれを養うことは難しい。また、良き先達に恵まれなければ更に困難である。人工的ではあれ、もっと自然を日常生活の中に持ち込んで自然の素晴らしさ、その自然を支える生き物達の素晴らしさ、面白さをより多くの人に理解してもらう努力が必要である。更に感覚的だけではなく、より学究的（アカデッミク）にそれらの素晴らしさを分ってもらう必要がある。そのためにこそ、博物館、植物園、動物園などの存在意義があろう。

これが、一度自然を破壊したことのあるヨーロッパ人がその経験から学んだことである。

（新潟大学理学部）